

小学校における「公共性」を育む「シティズンシップ教育」(3年次) ～友だちと自分の違いを排除せずに、理解し考える力を発揮する～

1 本校における教育研究の課題は何か

本校の「シティズンシップ教育」は学習において「公共性」を育む授業改善の取り組みである。本校で定義する「公共性」とは、「子どもたちが友だちと自分の違いを排除せずに、理解し考える力を発揮すること」であり、そのためには教師自身が民主主義とは何かを常に問い続け、「公共性」にかかわる資質・能力を協働で探求する視点と力量をもつことが必須である。

子どもたちに、授業（学習）を通して育てる「公共性」にかかわる資質能力が「公共性リテラシー」である。「公共性リテラシー」は全学習分野を通して育成する。

教育課程は「学習分野」と「創造活動」で編成し、今年度の教育実務指導研究会では各学習分野の授業を公開する。教育課程運用には協力学年担任制と学習分野担任制を併用している。

「公共性リテラシー」を育む教育課程の内容は『学習における「公共性」育成プラン』にまとめ、さらに教師の協働を持続可能なものにする協力学年担任制のあり方を提案する。

2 研究の仮説 ～どのような手段を考えたか

① 協力学年担任制

個々の教師が他の教師と協力して子どもを育てるという考え方から「協力学年担任制」を採用する。

② 学習分野担任制

全ての教科（学習分野）で「公共性」を育むことをねらい、目の前の子どもの実態から教育内容や方法の研究を具体的・専門的に進めるために、「学習分野担任制」を採用する。「協力学年担任制」で安定の基盤をつくった上に教師の専門性を生かして子どもを育てるという考え方である。

③ 各学習分野で『学習における「公共性」育成プラン』を作成する

全ての学習分野において、「公共性」育成に資する教育内容や適切な方法を抽出し、本校オリジナルの『学習における「公共性」プラン』を作成する。そのプロセスで、学習分野で育む「公共性リテラシー」を明らかにする。

④「公共性」を高める校内研究のあり方をデザインする

【授業者が学習指導案を考える ⇒ 校内授業研究会 ⇒ 実践記録を授業者が書く ⇒ グループで読みあい省察する ⇒ 各自の授業改善に活かす（実践者は記録を書き直す）】という専門職としての教師の対話的な校内研究サイクルを確立する。

3 教育課程の特例 ～文部科学省指定研究開発学校として

教育課程は、「学習分野」（ことば・市民・算数・自然・音楽・アート・生活文化・からだ・なかま）と「創造活動」で編成する。

4 研究の概要 ～教育課程の内容について

① 開発した教育課程の目標・・・「公共性」を創り出す

前回研究開発（H17～H19）で図1にあるとおり、協働して学びを生み出す子どもを育てる3つの視点のひとつに「公共性」があることを提案した。

H20～H22は、特に「公共性」に焦点を当てて、小学校教育課程で育成できることは何か、教科（学習分野）で必要な内容・方法を開発した。その際、教師自身の授業改善を基盤として研究を進めた。

研究の動機は昨今の子どもの実態、子どもを取り巻く社会の風潮や価値のおき方、その中で学校教育が担うべきことは何か、などへの問題意識である。

例えば、主張はするが他者の声を受け止められない、

白か黒か決着をつけたがる、権威に弱い、公共の場の意識が薄いなど現代っ子の姿の一面であろう。ここからは、学習において関わりあいの質をじっくり問い直すことや、現代社会の複雑で多様な問題（必ずしも正解がひとつでない課題）から目をそらさずよく考え判断することや、そういう学習にふさわしい場づくりという教育課題が見いだせる。そこで本校では3年間の研究課題として「公共性＝友だちと自分の違いを排除せずに理解し考える」を取り上げたのである。

また、一方で、近年のシティズンシップ教育の流れの中で、本校の教育課程の特色を明確にしたいという願いもある。シティズンシップ教育とは、学校教育と社会教育の境界を越えて多様な可能性をもつ研究領域である。国内外の先進的な取り組みを参考にしながら本校の研究として担うべきことを探った。

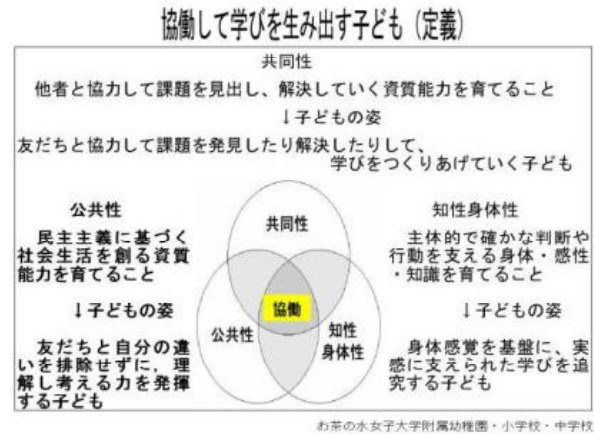
シティズンシップの定義については、『シティズンシップ教育宣言』（経済産業省2006「シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会」編）にある「多様な価値観や文化で構成される社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的に（アクティブに）関わろうとする資質」を参考にした。

では本校で取り上げる「公共性リテラシー」とは何か。これからの世界・日本を担う子どもたち（将来の市民）には、自分（私）や回りの人や社会に愛着をもち、もつがゆえに公（パブリック）を良くしたいと考え判断し行動することが求められる。先ほどのシティズンシップの定義にあるように、自分の属する社会を理解し、その社会からより広い世界への問題関心をもつだけでなく、自分の役割を理解して社会を育てる意識と行動も必要である。そのような市民として生涯にわたり成長していくためには、小学校の発達段階にふさわしい「公共性」を創り出すこと、すなわち「公共性＝友だちと自分の違いを排除せずに理解し考える力を発揮する」が十分にできるように育てること、そのような場・環境をみんなで創り出していく過程が重要である。

以上のことから、本校では、授業を通して育てたい「公共性」にかかわる資質能力を「公共性リテラシー」と名づけた。シティズンシップ教育を特定の教科領域で行うのではなく、全学習分野を通して行う教育と位置づけた。シティズンシップ教育をトピック的な教育活動や特別活動ではなく、日常的な授業改善としてカリキュラム全体に浸透させるものと捉えたのである。

つまり学習分野（教科）の授業において「公共性」を創り出し「公共性リテラシー」を育てるといふ、日常の授業中心の立場をとる点に、本校の実践研究の特色がある。

（図1 第71回教育実際指導研究会発表要項 P11）

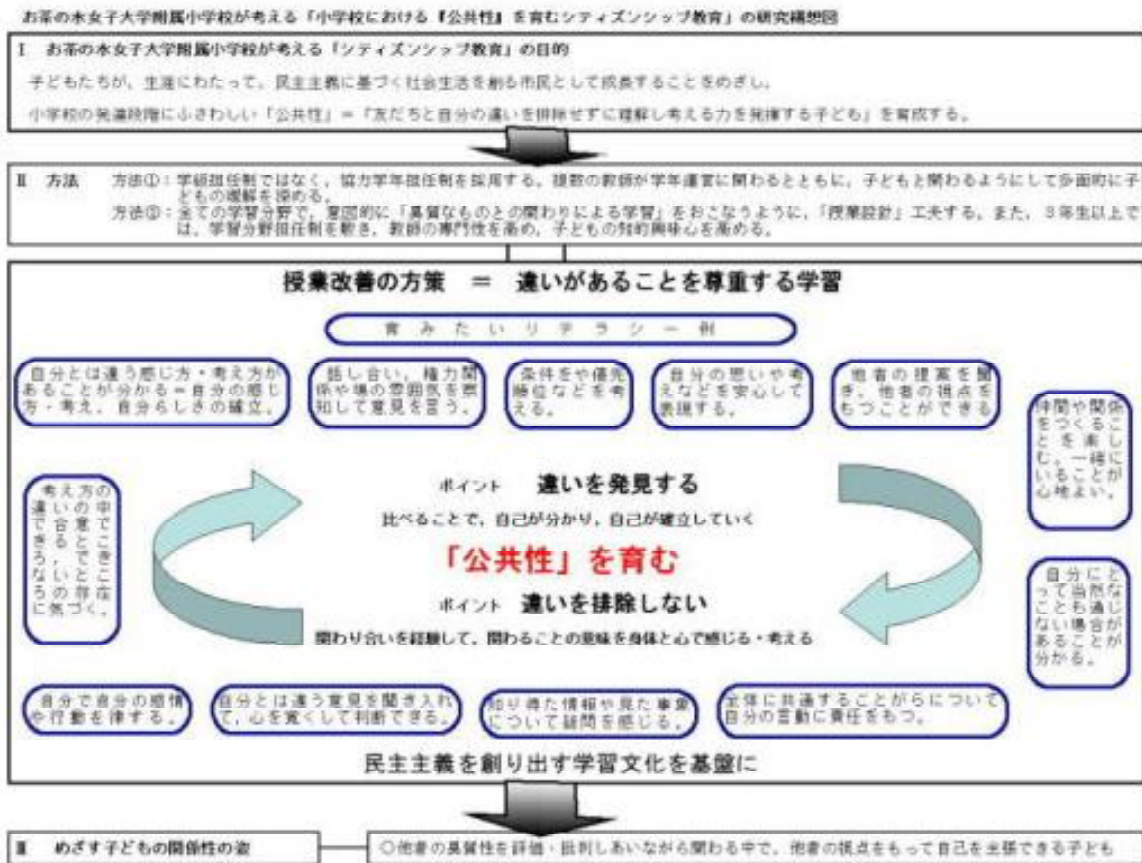


研究課題を整理すると、次のようになる。

- 「公共性」 教育研究の目標
- 「シティズンシップ教育」 教育内容・方法（各分野の授業改善）
- 「公共性リテラシー」 子どもに育てたい資質能力

② 研究全体構想図

(図2 2009 第71回教育実務指導研究会発表要項 P13)



③ 「公共性リテラシー」について

「公共性」を創りだし「公共性リテラシー」を育成することの意義

- ↓
- 遠い願い：子どもたちが、生涯にわたって、民主主義に基づく社会生活を創る人間として成長すること
- 近い願い：子どもたちが友だちと自分の違いを排除せずに理解し考える力を発揮すること

リテラシーとは、一般的に言えばもともとは「文字の読み書き能力」のことであり、教科を中心とする「教養的リテラシー」として発展した。しかし1990年代以降、高度情報化社会の到来によって、学校におけるリテラシー観は変様を迫られ、PISAに代表される実社会

(図3)



での活用を重んじる「機能的リテラシー」が重要視されるようになった。

本校でもそのような学力観の変遷を理解した上で、さらに「私」「あなた」「私たち」「みんな」の関わりに着目し、関わりを質を授業（学習の場）で問い直していくことが鍵になる、と捉えた。

関わりを質の民主的な変化を促したり、「公共性」ある空間づくりにつながるような資質能力を「公共性リテラシー」と定義したのである。

「公共性リテラシー」とは、授業（学習の場）において、感じ方考え方が複数であることをいかに対話的・応答的に乗り越えるか、違いを発見してよりよい学びをつくりだせるか、など、関わりを質の民主的な変化を担うとともに、そのような学習空間を創り出す資質能力である。

「公共性リテラシー」は個人に固着した力というよりは、関わりや学びの文脈や環境に埋め込まれて生まれ育つ。授業をつくる子ども同士だけでなく、子どもと教師の関係性や学習空間のあり方そのものを問い直すという性質もある。

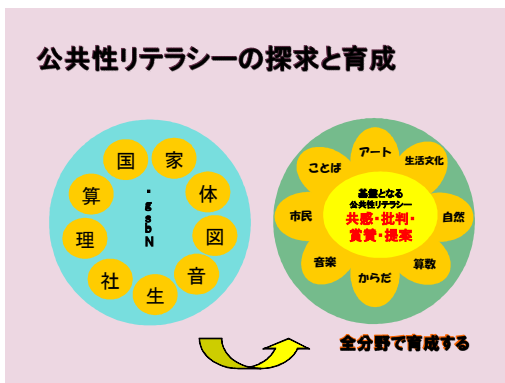
1・2年次に報告したとおり、学習分野ごとに養成しやすいリテラシーがあることや共通して育むリテラシーの存在が校内で議論の焦点となり、それぞれの分野の特徴を授業の実際に即して話しあってきた。

2年次には仮説として全学習分野で共通の「公共性リテラシー」を「共感・賞賛・批判・提案」の要素で考えることを出発点に、各学習分野の特徴を活かして育む「公共性リテラシー」を探求し、お茶の水版『学習における「公共性」育成プラン』にまとめる作業に着手した。

その際、学習分野は中学校・高等学校の教科につながるものであることから、中・高の教育課程との連続性を問う必要も出てくる。今回は小学校の発達段階に焦点を当てているが、「公共性リテラシー」については附属の立地を生かし、大学の諸先生方からのアドバイスを得て探求してきた。

各学習分野に共通する「公共性リテラシー」の要素	()内は子どもの姿の一例
共感（いっしょに居て息や声を合わせる心地よさや喜びを感じる。似た感じ方や考え方がわかる）	
賞賛（相手の考えや作品の良さをみつけることができる。どこがよいのか言える。長所を探す目をもつ。違いを発見することができる。違いを恥ずかしながら、また受け入れる気持ちをもっている）	
批判（違う立場や考え方のすじみちを理解することができる。違う表現を即座に否定しない。比較して考えるための知識を得ようとする。なぜ、そう思うのか、根拠を言うことや問うことができる）	
提案（こわす批判ではなく創る提案にもっていく思考ができる。判断に責任をもつ姿勢がある、説得やプレゼンテーションの力がある。異なる意見をよく聴いて、違うわけを考えられる）	

（図4 「公共性リテラシー」の探求と育成）



私たちは授業と省察を通して4つの要素をもとに多様な「公共性リテラシー」の探求を進めた。学習中の子どもの姿から探ることによって、違いを考えながら聞く、意見の理由を言う、あいまいな点を質問するなど、「公共性リテラシー」の具体的な姿を洗い出す。それは④『学習における「公共性」育成プラン』に結実したと言える。

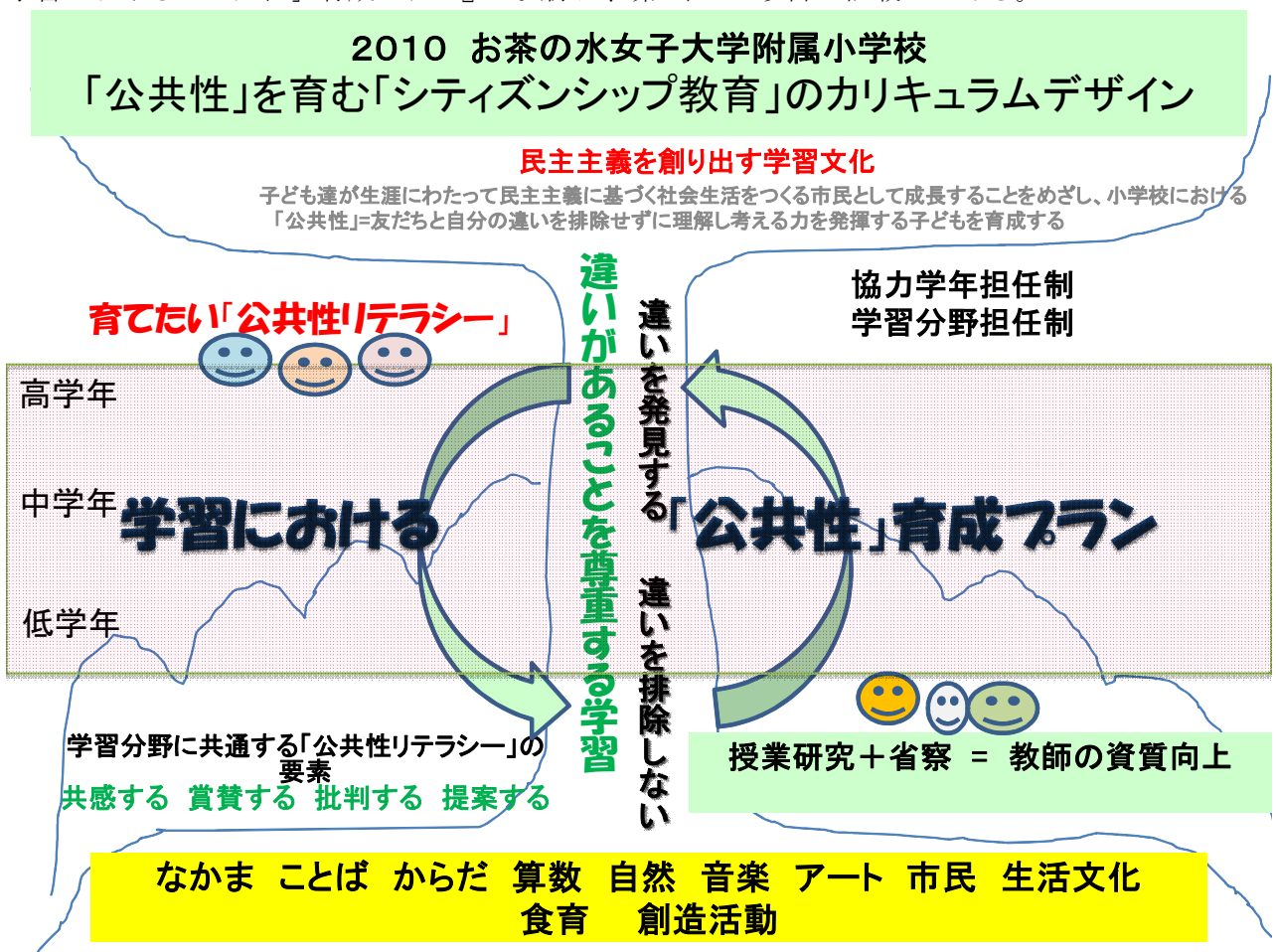
一方で、「公共性リテラシー」の育成には、指導上の工夫や単元開発に取り組む「教師の協働」が欠かせない。例えば、表現する場づくり、対立する考えが出るような題材の工夫な

ど、一人では気づかない実践の改善を、「問うー応答する」授業研究会をデザインすることによって可能にした。

④『学習における「公共性」育成プラン』の作成

各学習分野の目標は学習指導要領（教科）と比較検討をしながら「公共性」に近づく特色を考えた。次に、学習分野で育てる「公共性リテラシー」を明確にし学習活動例も若干記載した。2年次に中学年を対象に作成し、3年次には低学年・高学年にも広げて教育課程上8つの学習分野の「公共性」育成プランとして提案するところまで研究を進めることができた。

ただし、『学習における「公共性」育成プラン』の試みは途上にある。プランはさらに妥当性を吟味・修正され、教師が子どもの学びの姿を「公共性」の視点でよみとることや、現状を見直すことにつながっていくからである。この作成作業は同じ分野だけでなく異なる分野の教師の対話を生み出している。『学習における「公共性」育成プラン』の実際は、第4章P166以降に記載してある。



⑤ 教育課程表

H13～H15の研究開発において附属幼稚園と、H17～H19に附属幼稚園・附属中学校と共に開発した「学習分野」による教育課程編成を継続している。「学習分野」とは、子どもの生活から生まれる学びを大切にしている幼稚園の「保育分野」の考え方を生かして、幼・小で取り組む「接続期」研究から生まれた概念である。現在も「学習分野」の趣旨には、教科の目標・内容・方法を目の前の子どもたちの学びや発達に照らしながら柔軟に組み換え、一人一人の学ぶ意欲やみちすじを大切に展開すること、教科の垣根を低くして教師同士の協働を活性化する姿勢が受け継がれている。

(参考) 本校の「学習分野」に対する考え方は、「幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発～関わりあって学ぶ力を育成する教育内容・方法、平成14年度第2年次報告書」P11に以下の記述がある。

関わりあって学ぶ力を育てるために

(1) 個の学びの確立

- 身体感覚を十分に働かせ、自らの学びが実感できるような学習活動を組織すること
- 内面に揺さぶりをかけ、多様な情動を喚起し自分なりに表現できるようにすること
- 互いの違いを認め合うことから、認知の変容、深まりを促すようにすること

(2) 協働と学び

- 個々の違いを互いに受容、承認、尊重する姿勢をもたせること
- 関わりあいの中で起こる迷い、葛藤、試行錯誤を積極的に生かすこと

今年度は、ことば、市民、算数、自然、音楽、アート、生活文化、からだ、からだ（保健）、なかま、食育の授業研究を行い、「公共性」を育む教育課程の内容や方法を全体で検討した。

創造活動については、本校の研究において歴史的にも重要な部分であるが、今回の開発では課題領域に含めず、教科（学習分野）に焦点をあてた。理由は、まず「公共性」にかかわる学習分野の内容・方法を重点的に整理したうえで、以後、創造活動と学習分野の関連に改めて研究を広げていく長期的な視野をもち、この3年間を1つのステップと考えたからである。

食育に関しては、学習分野の枠外の給食指導の一環として位置づけた。子どもたちにとって食育は、全体の学習活動を充実するための健康なからだづくり、大切な基盤である。今のところ、給食を中心とした食育の他に、給食指導の発展として内容的に関連する学習分野と連携して取り出し授業を行う場合もある。本校では給食施設の新設置に伴い、食育を2009年度から本格的に始めたところなので、教育課程上の位置づけについては今後検討を加えていく。

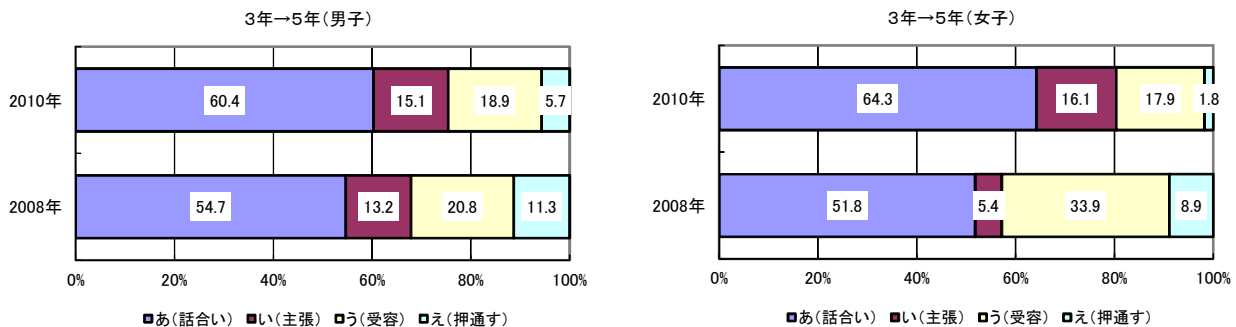
平成22年度 教育課程表（一般学級）

学年・時期	学習分野								創造活動	計	
	ことば	市民	算数	自然	音楽	アート	生活文化	からだ	小1・小2は「なかま」		
小6	175	105	175	105	70	70	70	105	140	1015	
小5	175	105	175	105	70	70	70	105	140	1015	
小4	175	105	175	105	70	70		105	175	980	
小3	175	105	175	105	70	70		105	175	980	
小2	267		175	70	52	52		105	176	897	
小1	9月～3月	154	88	33	33	33		66	99	506	
	接続後期	ことば・なかま・からだ・かずとかたち								286	792
	接続中期									286	

5 研究開発の成果と課題

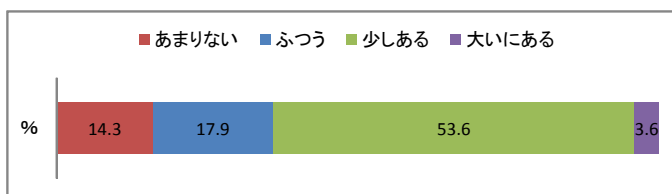
(1) 新しいカリキュラム実施による成果の一例

子どもの変容



「友だちと意見が異なるときの行動」について「話し合い」(男 54.7 → 60.4 %、女 51.8 → 64.3 %) を選ぶ児童が増え、「押し通す」が減り「主張する」が増えている。このことは異なった見解に対して自己主張をしながらも意味ある対話で対処しようとする力が全体的に伸びたことを表わす一例であろう。

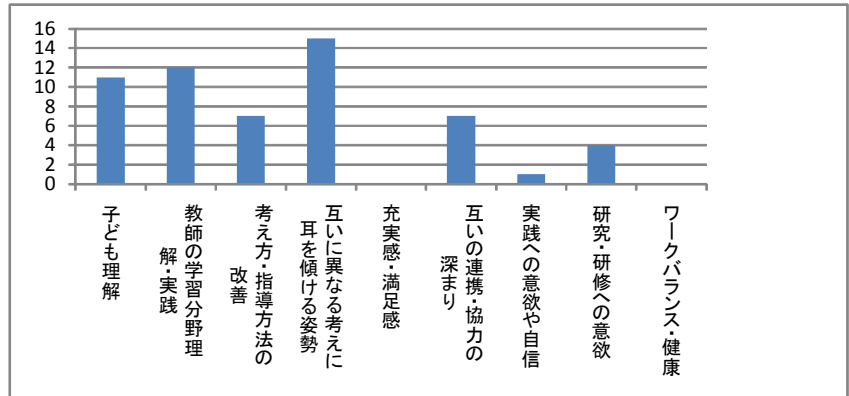
教師の変容



これは、3年前の研究開発開始当初と比べて、「公共性」を育む「シティズンシップ教育」について教師自分自身の教育活動の質が向上したか、についての返答である。「少し」「大いに」57%、従って、教師への効果は6割弱である。

また、具体的に変化が見られた観点についての質問では(右図)「異なる考えに耳を傾ける姿勢」や「子ども理解」が高いが「充実感・満足感」と「ワークライフバランス・健康」が「ゼロ」である。

これは研究の進展は認めながらも現実の教師の多忙感や消耗度を表しており研究開発のマイナス面とも言える。



保護者・地域社会の学校への関心

- ① 保護者の保護者会への参加率は全学年ともほぼ100%、さらに「まきば会」という父親と教員の親睦会が2009年度に発足して、学校行事の際などの保護者の協力体制が堅固になってきている。
- ② 毎年秋に2回行われる学校説明会(次年度入学希望の家庭対象)来校者が、平成21年度4280名、平成22年度4418名と増えている。今年度はその場での公開質疑に「シティズンシップ教育とはどのような授業ですか」「公共性の内容について具体的に教えてほしい」といった本校の特色ある教育課程に関するものが出て、研究校としての教育やテーマに対する親社会の関心の高さが伺われた。

(2) 実践研究の問題点と今後の課題

① 「公共性」を育む学習分野と創造活動、双方の学び・学習環境のさらなる探求

「学習分野」それぞれで育成する「公共性リテラシー」は『学習における「公共性」育成プラン』作成の過程でほぼ明確になった。子どもたちへの教育効果も少しずつ見え始めている。

しかし、学習分野外の創造活動（総合的な学習の時間ほか）における「公共性」にかかわる学びの探求や環境づくりは研究途上なので、教育課程全体構造をシティズンシップ教育の視点で示すまでには至らなかった。総合的な学習を視野に入れた「公共性」の実践研究を積み重ねて、授業とカリキュラムの改善を続けることが本校の今後の課題である。

② 「公共性リテラシー」の評価について

私たちは授業の中で、子どもたちが関わりあいながら違いを尊重して学びあう姿を追求してきた。そのことが、全教師の智慧を集めた『学習における「公共性」育成プラン』に反映されたと言える。

しかし、「公共性リテラシー」の評価の問題は、それが個人固有の「学力」というよりは、他者とともに学び続ける「学習力」と考えられることから、その場の状況・環境に影響を受ける。したがって子ども同士の関わりを的確に見とる（よみとる）教師の力量が第1に問われる。ある教師の声を載せる。

まず学習観の変化による子どもの学んでいる姿の見取りが変わったことが挙げられる。「公共性」を育むうえで子どもに味わわせたい世界として他者との葛藤や試行錯誤する行為があった。これまでの授業では「効率的に〇〇を習得させる」ことを目指してきたあまり、子どもの葛藤や試行錯誤をマイナスにとらえ、むしろ授業から排除してきたと考えられる。しかし、子どもの学びに寄り添って考えると他者との葛藤や試行錯誤にこそ教育的価値があるのではないだろうか考えるようになった。教師がこのような視点で子どもを見つめるようになったことで授業中に子どもにかかる言葉やまなざしが変わった。子どもにしてみれば「評価の声」が変わったのだろう。そうすることで、子どもは他者との葛藤や試行錯誤が繰り返される学びの世界に入っていくことができるようになったと考える。そのプロセスに子どもに気づいてもらいたいことが埋め込まれていたように感じた。からだの授業では「違いを楽しむ」という視点の学習を組織できたことも成果だった。「みんな同じ」から「違いを楽しむ」という授業に変化してきたことで、「うまい子が主役」の授業から「わたしも主役」の授業へと変わった。子どもたちは技能差にかかわらず、苦手意識の強い子も生き生きと授業に参加できるようになったと実感している。課題は「公共性」が育まれているという成果を明確に提示することである。この概念は数値で表しきれないものである。教師はその場に参加する者としての主観で子どもの姿から語るのだが、それだけでは説得力に欠けるのかもしれない。質的分析も活用して成果を語っていけるようにしたいと思う。（2010年10月の校内研記録より）

「公共性リテラシー」を見とる（よみとる）ことを教室レベルで考えると、授業中に起きる異質な考えのぶつかりや葛藤をどう捉えるか、子どもの一見ささいなつぶやきにどう対処しているか、何を大切と願ってグループ指導しているかなど、各教師が「公共性リテラシー」を自分の内面でどう捉えているかが重要である。どのように言葉かけやふるまいをしているか、学習環境としての教師そのものの教育観・価値観が問われることになる。したがって評価のものさしを全教師で一元化・一般化することが難しい。私たち自身、評価のものさしの共通概念化は未着手である。このことは校内研究（授業研究）の中での「対話」によって可能になるだろうという手ごたえは得ているので、さらに追求していきたい。「公共性」や「シティズンシップ教育」は概念レベルで共有されるだけでは机上の空論であり、実際の教室での営みの背景にある私たち自身の民主主義への感覚が鋭敏になってこそ、豊かな教育成果を挙げることができる。そういう意味で、子どもと教師のシティズンシップを育みあう現在の校内研究の在り方に、さらなる改良を加えてゆくことが今後の課題である。

平成22年度研究推進部（浅川、小野澤、神戸、草野、郡司、佐藤、猶原、成家、堀井）

•

•